

令和6年度第1回千葉県立中央博物館リニューアル基本計画検討懇談会 議事録

- 1 日時 令和6年7月10日（水）10時～11時25分
- 2 会場 千葉県立中央博物館 会議室
- 3 出席者 委員 林座長、阿児委員、亀田委員、栗原委員、駒見委員、瀬能委員、
染川委員
千葉県庁環境生活部 板倉スポーツ・文化局長、石島文化振興課長、
立和名副技監兼学芸振興室長、小野主幹、水野副主査、
宮川副主査、二葉技師
現代産業科学館 尾崎館長
関宿城博物館 糸原館長（オンライン参加）
中央博物館 稲村館長、田中副館長、小田島副館長、島立事業部長、
伊左治企画調整課長、石渡上席研究員、小出研究員

4 内容

●議題

- (1) 令和6年度千葉県立中央博物館リニューアル基本計画検討懇談会の進め方について
- (2) 千葉県立中央博物館実施計画の骨子案について
- (3) 今後の展示等について

●報告

- (1) 千葉県立中央博物館の組織改編について

5 議事

【説明1】令和6年度千葉県立中央博物館リニューアル基本計画検討懇談会の進め方について（立和名室長）

【瀬能委員】

資料を拝見する限り、3回予定されている会議の中で、実施計画と施設整備計画については2回ずつお諮りいただくとのこと。第3回の議題として挙がっている評価制度についても、第2回会議の時点で頭出しだけでもしていただいたほうがよいのではないかと。

【立和名室長】

可能ならば、御要望のとおり第2回会議の時点で頭出しできるようにしたい。ただし、評価制度については第3回会議の場だけでなく今後も御助言いただくことになるかと考える。

【瀬能委員】

本懇談会は今後も続いていくということか。

【立和名室長】

あくまで今年度の会議は全3回を予定しているが、現時点では、みらい計画に基づく事業が軌道に乗るまでは、委員の先生方に継続して御尽力いただきたいと考える。

【瀬能委員】

承知した。

【説明 2】中央博物館実施計画について（稲村館長）

【瀬能委員】

事前説明の際も指摘したところだが、調査研究や展示普及に係る館としてのポリシーや目的を達成するための詳細を定めた要綱は開館当初からないのか。組織としての使命・目的が恣意的にブレないように、しっかり定めておく必要があると考える。

【稲村館長】

今後検討してまいりたい。

【瀬能委員】

資料4 ページ以降に示されているスケジュールにおいて、自然科学分野の学術的成果は論文や報告書等によってなされるもので、展示や教育プログラムは学術的成果を社会に還元するためのものである。この資料で示されているスケジュールでは、展示の前に論文や報告書の出版が想定されておらず、順序が逆である。

【島立部長】

御指摘の点については今後再検討させていただく。

【瀬能委員】

現在想定しているスケジュールでは、未発表の成果を展示にすることになりはしないか。

【島立部長】

成果の発表という点については、自然誌系と人文系では考え方が異なるところもある。そうした点も踏まえ、御指摘の点については考え方を整理してまいりたい。

【栗原委員】

私が所属している国立科学博物館は、「独立行政法人国立科学博物館法」という法律においてその目的等が定められている。県立施設では設置条例等がそれに相当するものと思うが、いずれにせよ条文においてはざっくりとした内容しか記載されていないだろう。それを補うものとして、設置目的やポリシーはあったほうがよい。

ちなみに、国立科学博物館でも設立150周年を前に組織のミッション見直しを検討している。今回のような機会でもなければ定めることはなかなか難しいと思われるので、できれば検討していただきたい。

【亀田委員】

骨子案のスケジュールを見る限り、複数のプロジェクトが同時並行で動き、しかも2、3年で成果を展示として還元することとなっている。かなりタイトなスケジュールと思うがどうか。

個々の研究成果は2、3年で出てくるものもあると思うが、展示として練り上げる際にはストーリーが大事。すでに走り出している案件はともかく、新規プロジェクトについては、

5年程度はみておかないといけないのでは。

【稲村館長】

性急になりすぎず、成果を着実に蓄積することができるよう進めていくこととしたい。

【阿児委員】

資料8ページ目、DX化についてだが、デジタルデータの公開に係るポリシーは別途定める必要があると考える。千葉県としての情報公開に係る指針等があるはず。せっかくデータを公開していただくのだから、それが各種研究への自由な活用に資するものとなるよう、検討していただきたい。

【稲村館長】

承知した。

【駒見委員】

この後御報告いただくことと思うが、今年度から新たに「博物館学研究グループ」を設けられたとのこと。

先ほど研究成果の発表に関する話題があったが、個々の事物についてだけではなく、展示やそれに伴う教育普及など、博物館事業の全体に関する包括的な研究活動も今後進めていくと考えるならば、展示の後に報告書の発行等がなされるスケジュールもありうるものと考えている。

【林座長】

博物館学研究グループの活動には期待したいところである。

【瀬能委員】

資料7ページ目に記載の「貴重書閲覧システム」について、事前説明でも指摘したところだが、有名な貴重書、とくに印刷物についてはBHL (Biodiversity Heritage Library : 「生物多様性遺産図書館」) などですでに公開されている可能性が高いので、そうした他のアーカイブとの住み分けについてはどう考えるか。

【島立部長】

先日御教示いただいて確認したところ、御指摘のとおりだった。これについては今後方針の修正を前提とし、植物画や古文書など、当館のみで所蔵する一点もののデータ公開を優先して進めていくことを検討してまいりたい。

【瀬能委員】

資料のデータベース化の目標(登録数)がパーセンテージで示されているが、分野によって総数が大きく異なるので、分野ごとに実現可能な実数にした方がよい。

【瀬能委員】

コレクションポリシーの策定が「資料集約」の項目に振り分けられているのが気になった。

これでは今後他館の資料を中央博物館に集約することのみが目的のようになってしまう。リニューアルに係る部分だけでなく、永続的な資料収集活動全体を包括するものとして位置づけていただきたい。場合によっては「資料集約」ではなく「資料収集」のカテゴリーを別途作成し、そこに振り分けていただくことも検討してもらったほうがよいかもしれない。

【稲村館長】

承知した。検討する。

【林座長】

コレクションポリシーが決まるまでは何でも集める方針が良いと思う。

【林座長】

資料収集と切って離せないのが収蔵スペースの問題。国立科学博物館でもそうだが、ほとんどの博物館がこれに悩まされている。

【栗原委員】

ミュージアムにおける収蔵スペースの不足は国内だけでなく世界的な課題となっている。これを解消する一つ的手段として、近年は「見せる収蔵庫」を導入する施設も増えてきている。世界的な潮流も踏まえ検討していただきたい。

【栗原委員】

それから、資料3ページ目「世界とのつながりを意識」の項目において記載のある「貿易をはじめとした世界とのつながり」との表現には違和感がある。生物多様性に関することや、国際共同研究といった内容のほうが適切では。日本の玄関口としての成田国際空港を意識していかなければならないのはわかるが、書きぶりは工夫していただきたい。その点でいえば「他機関との連携強化」項目については海外の機関との連携を視野に入れてもらいたい。現状の計画では歴博との包括協定ありきに見えてしまう。2027年に国内でICOMが主催する国際会議が日本で開催される見込み。ぜひ中央博物館も参加していただき、ゆくゆくは中心的な役割を担う立場として食い込んでいけるよう、活動していただきたい。なお、骨子案では「博物館法改正の内容に対応し…」という旨の記述が散見されるが、改正博物館法が公布されたのは2022年4月。一方、ICOMがミュージアムの新定義を採択したのは2022年8月。世界的な視点から言えば、改正博物館法の内容はなお不十分ということ。このあたりについても博物館学研究グループが主導する形で検証してほしい。

【稲村館長】

御期待に応えられるよう、事業を展開してまいりたい。

【亀田委員】

資料2ページ目、みらい計画に則って進める取り組みを「つながり」の視点により整理していただいたとのこと。「分野」「地域」「情報」「人」「未来」と5つの柱がある中で、「人をつなげる」の視点が少し弱いと感じた。ハード面に係る記載は充実しているが、予算が伴わない、いわばソフト面に相当する部分はどうか。地域の人々や博物館利用者のニーズをどう

取り込んでいくかなど、館としてどうしていきたいのかがよくわからなかった。こうした点は先ほど瀬能委員からも指摘のあった評価制度の、誰が何をどのように評価するのかというポイントにもかかわってくると思われるので、手厚くしていただいたほうがよい。

【稲村館長】

御指摘感謝する。

【説明 3】 中央博物館の主な展示について（令和6・7年度）（稲村館長）

【染川委員】

こうした展示事業を展開していくなかで、リニューアルに向けた新たな取り組みを試していくことが大事。いかに人を巻き込んでの事業を展開させるかなど、いわば予行練習になると考える。

「海の幸」展については、伝統的な海の幸のみならず、外来種でありながら近年盛んに食材として活用されつつあるホンビノス貝のことなど、現在の社会情勢といった視点も含めて展示にどう反映されるのかという点も含め期待したい。

「生薬」展についても、台湾や韓国においては日常生活に密着した文化として定着しているが、日本ではそうでもないという題材。5つの柱とも関連するのではと思うが、アジアと日本のつながり、さらには人のつながりといった視点も盛り込んでいただき、充実した展示としていただきたい。

【稲村館長】

御意見感謝する。今後さらにブラッシュアップさせていく中で検討してまいりたい。

【阿児委員】

展示と並行して、資料のデジタル化やデータベースへの登録を積極的に進めていただくとうよいのではないかと。資料点数も非常に数えやすくなるし、また来館者が帰宅後にデータベースを閲覧して、展示内容を復習できるような形ができていると非常によいと思う。ぜひ両事業については一体のものとして計画的に進めていただけたらと考える。

【説明 4】 中央博物館の組織改編について（稲村館長）

【瀬能委員】

学芸員が事業部の各課と各研究グループとを常時兼務するとのことだが、学芸員が博物館の3つの機能（資料の収集・保管、調査・研究、展示・教育普及）の担い手になることができる体制は担保されているか。また、事業部の課への所属は固定でないとして、どの程度のスパンで回していくイメージなのか伺いたい。

【小田島副館長】

今年度からの新体制なので确实なところはまだわからないが、概ね2、3年程度を目途として各部署を回るような形となる見込みである。

【亀田委員】

通常組織改編というものは大きな計画の策定などに合わせ、計画を進めやすくするために行われるという認識である。運営体制については随時見直しができるよう、体制の検討も実施計画に入れ込んでおいたほうがよいのでは。方針の転換等に柔軟に対応することができる組織であることが大事。

また、説明を聞くと事業部が本務のイメージかと思われるが、琵琶湖博物館は逆で研究グループが本務と位置づけている。実際の館運営ではどうしても事業部の業務が増えていってしまうものだが、それでも事業と研究のエフォートは半々という主張を館の方針として守り続けている。事業部長と研究部長も兼務とのことだが、あまりにも大変では。私の所属ではありえない人事。事業部長と研究部長は拮抗する存在で、調査研究部門と事業部門がせめぎ合うことで、お互いに活動を高め合うものと考えているが。

【稲村館長】

御指摘を踏まえ、適切な館運営ができるよう出来得る限りの手当てをしてまいりたい。

【立和名室長】

亀田委員の御指摘事項については、千葉県で約20年間学芸員の採用が絶えていた時期があったことによるひずみの表れ。実際のところ、課長を務める人材の確保にも苦心しているのが実情である。公募に経験者採用の枠を設けるなど、さまざま手段を講じているが、今すぐに理想的な体制を構築することは困難なのが正直なところ。博物館として目指すところは守りつつ手当てしてまいりたいと考えているので、長い目で見守っていただけるとありがたい。

【染川委員】

琵琶湖博物館の運営に係る外部委員を10年以上務めてきた経験から一言申し上げる。論文の執筆など、調査研究に係る業績は比較的目に見えやすいが、一方で館運営の一環として事業を担っている方の業績は可視化しづらいもの。特に特別展の主担当などは、そうした業務が得意な職員に集中しがち。調査研究に限らず、事業にかかる職員の業績も可視化していけるよう、手立てを考えていただけたらと考える。

【林座長】

この短い時間の中でもさまざま有意義な意見が出たと認識しているが、博物館においてはそれぞれの意見についてしっかりと御検討いただき、前向きに取り組んでいただきたい。